

平成 29 年 12 月 19 日
地震調査研究推進本部
地震調査委員会

綱附森断層の長期評価

これまでに行われた調査研究成果に基づいて、綱附森（つなつけもり）断層の諸特性を次のように評価した。

表 1 綱附森断層の特性

項目	特性	信頼度 (注 1)	根拠 (注 2)
1. 断層の位置・形態			
(1) 構成する断層	綱附森断層		文献 1、2 および図 2 参照。
(2) 断層の位置・形状	断層の位置		文献 2 および地形の特徴から推定 (図 2)。
	(西端) 北緯 33° 47.2' 東経 133° 53.1'	○	
	(東端) 北緯 33° 50.4' 東経 134° 01.5'	△	
	地表の断層の長さ 約 14km 一般走向 N65° E	△ ○	
(3) ずれの向きの種類	右横ずれ断層 (北上がり変位を伴う)	○	地形の特徴から推定 (図 2)。
2. 断層面の地下形状			
(1) 断層面の傾斜	ほぼ鉛直 (地表付近)	○	ずれの向き及び地形の特徴から推定 (図 2)。
(2) 断層面の幅	上端の深さ 約 0 km	◎	D90 による地震発生層の下限深さの値がなく補間値からの推定で 10-15km 程度。
	下端の深さ 10-15km 程度	▲	
	断層面の幅 不明	—	
(3) 断層面の長さ	不明	—	

3. 過去の断層活動			
(1) 平均的なずれの速度	不明	—	
(2) 過去の活動時期	不明	—	
(3) 1回のずれ量(注3)	1 m程度	△	長さから文献3により推定。
(4) 平均活動間隔	不明	—	
(5) 過去の活動区間	全体で1区間	○	
活動時の地震規模			
(1) 活動時の地震規模(注4)	M6.7程度	▲	長さから文献4により推定。
地震後経過率			
(1) 地震後経過率(注5)	不明	—	

注1：信頼度は、特性欄に記載されたデータの相対的な信頼性を表すもので、記号の意味は次のとおり。

◎：高い、○：中程度、△：低い、▲：かなり低い

注2：文献については、本文末尾に示す以下の文献

文献1：活断層研究会(1991)：「新編日本の活断層—分布図と資料—」，東京大学出版会，437p.

文献2：中田 高・今泉俊文編(2002)：「活断層詳細デジタルマップ」．東京大学出版会，DVD-ROM 2枚・60p.

文献3：松田時彦・山崎晴雄・中田 高・今泉俊文(1980)：1896年陸羽地震の地震断層．地震研究所彙報，55，795-855.

文献4：松田時彦(1975)：活断層から発生する地震の規模と周期について．地震第2輯，28，269-283.

注3：経験式によれば、1回の活動に伴う変位量D (m) は、断層の長さL (km) を用いて、 $D=0.1L$ と表される。

注4：経験式によれば、活動時の地震規模M (マグニチュード) は、断層の長さL (km) を用いて、 $M=(\log L + 2.9) / 0.6$ と表される。

ただし、長さ20km未満の活断層には適用できない可能性があるため、ここでは信頼度を▲とした。

注5：最新活動(地震活動)時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。

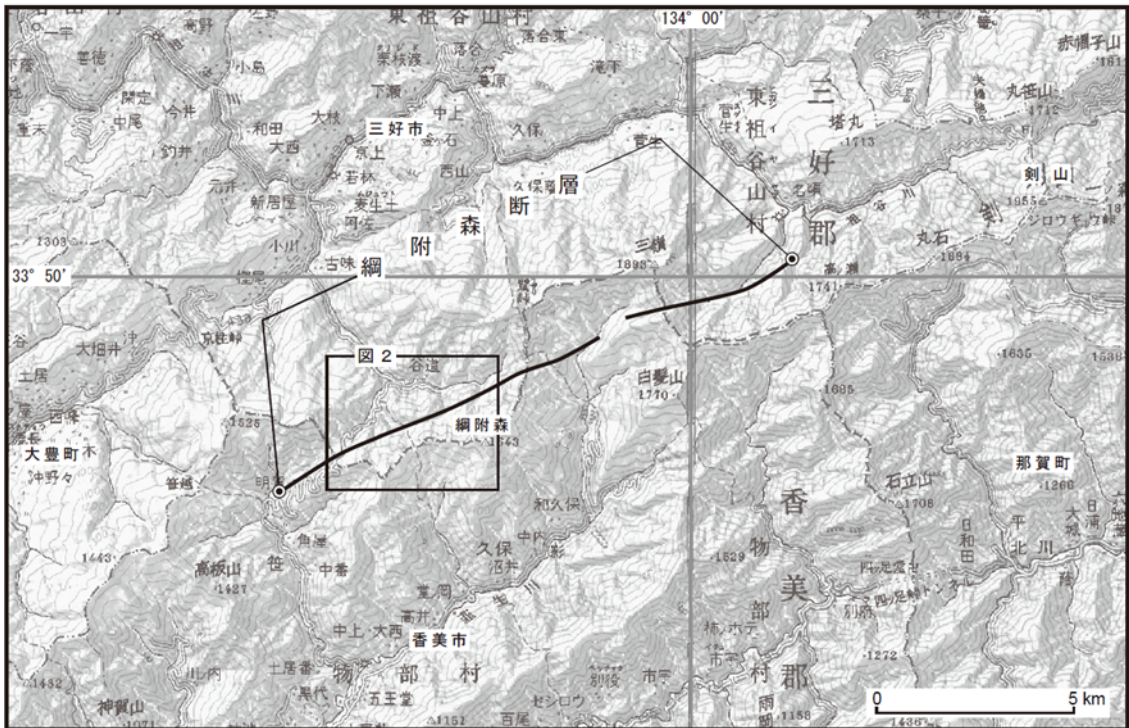


図1 網附森断層の位置

● : 断層の端点

基図は国土地理院発行数値地図 200000「剣山」

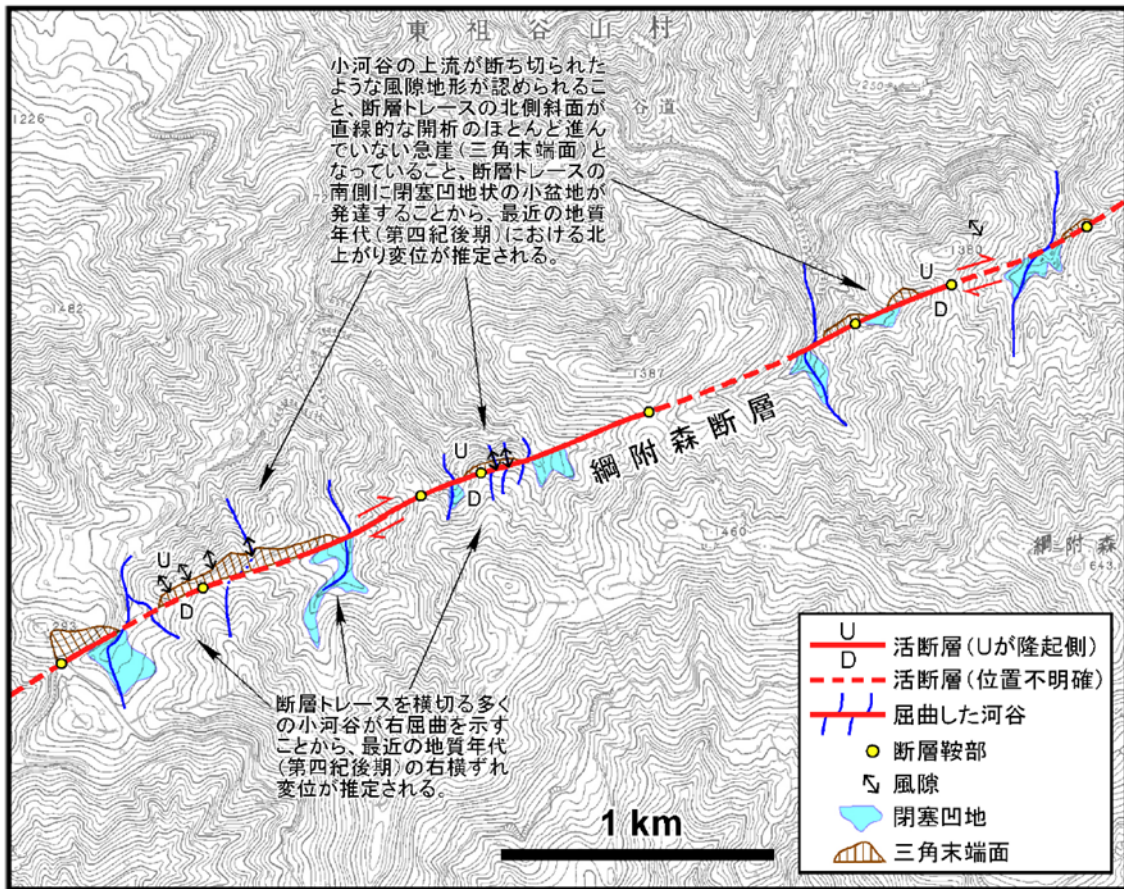


図2 綱附森断層の位置・形状と活動性の根拠。図に示すように、第四紀後期に活動したことを示唆する断層変位地形が存在する。地震調査研究推進本部地震調査委員会での審議結果に基づく。